ガンダムビルドダイバーズ 渡り鳥達の夢

パン屋の土地

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とあるガンプラに惚れた主人公がＧＢＮでわちゃわちゃするお話。

※作中の登場人物・設定・ガンプラ等は、ガンダムビルドダイバーズ、及びビルドダイバーズＲｅ：ＲＩＳＥの二次創作に限り、良識の範囲内で自由に使用して頂いて構いません。

目次

ｗｅｌｃｏｍｅ　ｔｏ　ＧＢＮ（魔境にようこそ）――――――――　1
はじめてのフリーバトル（同意は問わない物とする）――――――――　8
帰還、そして出撃（やべーやつと姉を添えて）――――――――　17

ｗｅｌｃｏｍｅ　ｔｏ　ＧＢＮ（魔境にようこそ）

――――それは、偶然が重なって起きた必然だったんだと思う。

その日は、「偶然」にも大学の講義が早く終わり、「偶然」別の道を通って帰り、「偶然」その途中にあったガンダムベースに寄ろうと思い立ったのだ。そして、「偶然」店内の映像端末で流れていた映像に……心を、奪われてしまった。

そこでは、首の無い騎士みたいなガンプラが、まるでファンタジーに出てくる竜のようなガンプラと壮絶な勝負を繰り広げていて……

「きれい……」

綺麗だった。ボロボロになりながらも竜の喉元を突き破らんとする騎士の姿が、オールレンジ兵器を操りながらそれを迎え撃つ竜の姿が、どうしようもないほど美しかったのだ。

――――これが、私こと虹橋　空とＧＢＮの出会いなのでした。

ＧＢＮ――――正式名称を「ガンプラバトル・ネクサス・オンライン」と言うらしい――――は、フルダイブ型のＭＭＯＲＰＧゲームである。その最大の魅力は、ダイバーギアさえあればガンプラがなくともログインができる事であり、ガンプラを

作ったことが無い・作るのが苦手な人でも気軽にガンプラバトルが楽しめるのだ。（Wi○iより抜粋）

次の日、大学終わりの帰り道にて。

「……てな訳でGBNを始めたいんだけど、なんでキミはそんなにぷるぷるしてるの？」

「……ついに、ついに決心してくれたんだね空ぁぁぁぁ!!　いやあ嬉しいよ……一緒にやろうと言い続けてはや2年、たまに無視されたりして私の努力も無駄じゃなかったって訳だ！」

とはしゃいでるのは須藤　友奈、私のかけがえのないズッ友だ。

「それでそれで、機体は何にするの!?　やっぱ王道のガンダムタイプ？　それとも量産型？」

「ちょっ、まだそこまでは……」

「じゃあ今からガンダムベース行こうよ！　よし決まりー!!」

「キミそんなに押し強かったけぇ!?」

……まぁ、そんな訳で2日連続やってまいりましたガンダムベース。

「……にしてもガンプラなんて作るの何年ぶりだろ。ね、友奈のオススメはどの機体が……っていないし!?」

きっと好きな機体が売ってたんだろう、箱を１０個ほど抱えレジに向かう友奈の姿が遠くに……待って１０個？　買いすぎ……でもないか。
「さて、と。私もなんか見つけなきゃなー」
そう呟きながら大量のガンプラが陳列されている棚を見ていると、ふと右下に置いてある箱が目に入った。ちょっと気になったので手に取ってみると、そこには黒い羽付きのガンダムが描かれていて……えーっと、
「ぐ……ぐり……？」
「おっ、［グリンブルスティ］とはいい眼を持ってますなぁ」
「うわぁビックリした!?」
「ははは、ごめんごめん。そんなに驚くとは思わなくって」
振り向くと、両手いっぱいに紙袋を持った友奈がいた。……なんか増えてる？
「……それ、ちゃんと作るんだよね？　もう家に置き場少ないよ？」
「だいじょーぶだいじょーぶ！」
「本当……？　ならいいんだけど……あ、それでグリンブルスティって？　確か北欧神話の猪かなんかの名前だった気がするんだけど」
「よくぞ聞いてくれましたぁ！　ガンダム［グリンブルスティ］ってのはね、ガンダム［ケストレル］の元になった機体なんだけど、あっケストレルってのはＺガンダムの外伝漫

画の主人公機なんだけどね、あぁグリンブルスティに戻るんだけどなんといってもその魅力は機動性でそのままだとパイロットが持たないってことでとある理由でエゥーゴに譲渡されたグリンブルスティを改修したのがケストレルなんだけど」
「ごめんもう少し簡潔に」
「めっちゃ速いガンダム」
「おっけーざっくり理解した」
　Ｚの外伝かー、そこまでは把握してなかったなぁ……なんて事を考えてたら、友奈が近くの棚から普通のＨＧの倍以上あるんじゃないかって大きさの箱を持ってきた。
「ところでその友奈が何食わぬ顔で持ってきたどデカいガンプラは……」
「これ？　フルアーマー・ケストレル」
「ふるあーまーけすとれる」
　……解説が長かったので要約すると、ケストレルは追加装備で性能が変化するらしく、そのてんこ盛り形態がフルアーマー・ケストレルなのだとか。なるほど、ストライカーパックとかＧ―セルフ的なアレか。
「……決めた。私、この子にする」
「お、随分あっさりと決まったね」
「まぁ、ね。この子がすごく気になるってのもあるんだけど……その……折角友奈が教

えてくれたんだから、その気持ちに応えたいなって」
「空……!!　うぅ……こんないい子に育ってくれて、お姉さん嬉しいよぉ……」
「同い年だよね？」
　そんなこんなで［グリンブルスティ］とフルアーマー・ケストレル、あと色々と買い込んで、デザインを書き出すのに1ヶ月、思い描いたモノを作るのに1ヶ月半ほどかかり……
「……やっっっとできたぁ……!!」
――――――苦節2ヶ月半、ついに私のガンプラが完成したのだ。
「……ログインする時声掛けてって友奈言ってたけど……」
　正直、早く動かしたい。その気持ちが強くて強くて、こっそりログインする事にした。これは仕方ないことなんだ、うん。そんな訳で、少し前に作ったアカウントでログインする。
「ここがＧＢＮ……なんか、めっちゃ近未来って感じ……」
　基本的な流れは普通のＭＭＯＲＰＧと同じらしいので、ちょうど初心者用ミッションがあると言って話しかけてきたなんか胡散臭そうなチャラ男（個人の感想です）からミッションを受注する。
「えーっと……？　指定されたパーツを回収して届ける……お使いミッションね、なる

ほど。んで場所は……ハードコア……ハードコア？」

ハードコアと聞いて、とある動画が脳裏をよぎった。パペット？みたいなのがドラムを叩いているのだが、早回ししてるのかそのスピードが異常な程に早かったのだ。なぜだかそれが無性に面白くて、よく友奈と見て笑ってたなぁ……

「パペットでも群生してるのかな……」

そんなことを考えながら出撃ゲートへと向かい、見上げる。そこには……

「おおお……!!」

私の作り上げた、私だけのガンプラ。ガンダム［フェンリル］が立っていた。

特徴的な一対の羽はそのままに、腰部にケストレルのブレイク・バインダーが、背部にシスクードのブースターが追加され、カラーリングもティターンズカラーから濃い群青色に変えた。他にも色々と弄ったんだけど、それはまたあとで。そんな丹精込めて作り上げた相棒がそこにいることに思わず涙しつつコクピットに乗り込み、軽く動かして感覚を確かめる。

「やっぱGPDとは結構勝手が違うな……まぁ慣れるっしょ。よっし、行きますか！」

「ソラ、ガンダム［フェンリル］、出撃します！」

こうして私は、これから何度もお世話になる事になるハードコアディメンション・

ヴァルガに突撃するのであった、まる。

はじめてのフリーバトル（同意は問わない物とする）

ハードコアディメンション・ヴァルガ。

モヒカン戦闘狂ハイランカー天炎怪物モヒカンｅｔｃ．の魑魅魍魎が跋扈するここは、全体がフリーバトルスペースとなっており、申請無しで戦闘が始まるＧＢＮ内でも異質なやべーディメンションである。そんなやべー場所で、私は――――

『『『ヒャッハァー!!』』』

「わぁぁぁこっちくんなぁ!?」

――――大量のモヒカンたちと鬼ごっこを繰り広げていた。

時間は、だいたい３０分ほど前の出撃直後に遡る。

「さて、目的パーツは……」

―ＣＡＵＴＩＯＮ！―

!?　えっ何、ッ！」

唐突に鳴り響くアラーム音。咄嗟に回避行動を取ろうとバーニアを、

「おおおおおお!?!?!?!?」

……吹かしたら機体がぐるんぐるんした。理由は簡単、バーニアの片側のみで回避した為にバランスが崩れてしまったのだ。が、次の瞬間、先ほどまでいた場所をビームが通り過ぎた。
「あっぶな!?　こんのっ!」
お返しとばかりに、撃たれた方向にビームライフルを構え、何発か発射する。が……
『ハッハハハ、狙いが甘いなぁ!』
と、唐突に割り込まれた通信と共に先程狙撃したＭＳらしきものがビームサーベルを手に突撃してき……て……
「フリーダムゥ!?」
ここで私が驚いているのには理由がある。それは……フリーダムはフリーダムでも、Ｇ―セイバーに登場した量産型機の方のフリーダムだったのだ。
「よく作ったなぁ……めっちゃ丁寧に作られてるし……」
『死ねよやァ!!』
「いーやー、だっ!」
と機体を軽く後退させていなしつつ、反撃策を練る……あっ、良いこと思いついた。
さっきの回避の要領で回転させて……
「ぐっ、ううう……」

『急所から逸らそうってかぁ!?　だがてめぇの死は変わらねえ!!』
「死、ぬのっ、はぁっ……！」
　ぶつかる前にビームブレイドを展開させて……！
「お前じゃああああああ!!」
　叩き斬る!!
『んなっ!?　ぐあああああ!!!』
　断末魔と共に爆散するフリーダム。え、さっきの上手くいかなかったらどうしたのかって？　こっちがああなってた。っとと、とりあえずパーツの回収を……
『てめえよくもアニキを!!』
「また敵!?　さっきの奴のなか……ま……」
　なんで言葉に詰まったのかって？　そりゃあ……
『ぜってぇ許さねぇ!!』『てめぇは塵殺だァ！』『ぶっ殺してやらぁ！』『ドリルを付けておけばああはならなかったものを……』『やっぱ時代はザクなんだよ、ジムとか（笑）』『は？　お前表出ろよぶっ飛ばしてやる』『リーダーを落としたやつは汚物！』『ならやる事は決まってるよなぁ!?』
『『汚物は消毒だァー！　ヒャッハァー!!』』

……２０機近くいたら誰だって言葉に詰まるって。しかも全員（？）の敵意がこっち向いてるんだもん。それに対してこちらは１機。……うん。

「……三十六計逃げるに如かず!!」

『『逃がすかゴラァー!!』』

「逃げるに決まってんでしょうが!!!」

――――そして、現在（いま）に至ると言う訳です。

「だぁぁはっやい!!」

牽制で雑に撃った弾が当たって少し数は減ったけど、こっちも残弾が少ないのは痛い。下手に格闘戦に持ち込んだら蜂の巣にされるのは確定みたいなもんだし……でも逃げっぱなしじゃ何も変わらないし……というか……

「ザクもジムもいないじゃん!!　なんで全部ガ・ゾウムなの!!!」

さっき口論になりかけてたやつザク使ってないのかよ!!　そこは使えよ!!

「つだぁぁぁぁもう!!」

と、ひとしきり大声を出してから機体を反転させる。このまま逃げて続けて落とされ

るよりは……

「全員倒した方がいいに決まってる！　落ちなきゃ勝利倒せば儲けもん!!　おら来いやぁ!!」

腰に着けてる予備のEパックを全て投擲、それを相手の近くで撃ち落とせば……

「簡易グレネードもどきになる、ってね!!」

『ぎゃあああ!?』

よっし3機減った！　残り12機!!　ついでに今ので弾切れになったビームライフルを放棄して……1つくらい残しときゃよかった……

『貴様よくも!!』

味方の撃破で激昂したのか、4方向から同時に仕掛けてきた。なら……

「バインダーッ!!」

言葉と共に4基のバインダーが射出され、展開されたビームブレイドによって4機のガ・ゾウムが細切れに分解される。

これが隠しギミックの1つ……といっても、元設定知ってれば多分対処できるんだよねコレ。まぁとりあえず……

「ほらほら、どんどん来いやぁ!!」

こんなはずじゃなかった。ガ・ゾウムの内の1機のパイロット、ダイバーネーム『カンタ』は思わずそう呟いた。

いつものようにリスキルし、出来なくてもバランスを崩して着地した所を袋叩きにする、それの繰り返し。コレなら楽にポイントも入手できる、そう言われてフォースに入ったと言うのに。

なのに、これはなんだ？

『うぎゃあああ!!』

また1人やられ、ついに自分のみとなってしまった。あの青いガンダムに切り刻まれたのだ。動きが止まったところにハイパー・ナックルバスターを撃ち込むも、ビームブレイドに弾かれてしまう。

『この……化け物がぁぁぁぁ!!』

気がつけば、カンタはがむしゃらに突撃していた。サーベルを抜刀し斬りかかるも、サーベルを持つ腕ごと切断される。

『まだだ……!』

エネルギーがチャージされていないハイパーナックルバスターで殴り掛かるが、これも

溶断される。その瞬間を見逃さず、肩のミサイルポッドからミサイルを斉射……することは叶わなかった。背後から飛来したブレイクバインダーによって切断されたのだ。

だが、カンタはこれを狙っていた。有線型であろうと無線型であろうと、インコムやファンネルを操作するには、コンソールで指示を出すしかない。ならばその間機体制御はどうなる？　片手で操作したとしても限界があるだろう、ゼロ距離射撃を瞬間的に回避することはほぼ叶わない。そして彼のガ・ゾウムには、個性をつけようとして腹部に取り付けたメガ粒子砲があったのだ。

『貰った――――――！』

他のメンバーが倒せなかった相手を倒した――――――！　と思わずにやける顔を直そうともせずにトリガーを引き絞り、今まさに青いガンダムを葬らんとしたその時、ふと疑問が生じた。あの機体の目の色は、あんなに赤かっただろうか？　そう思った次の瞬間、彼の視界は暗転した。

機体の変化に最初に気がついたのは、多分私だった。残りの2機のうちの片方を落とした時だ。

『よっし！　あと1機……ッ!?』

機体を最後の1機に向けようとした時に半ば直感に近いもので気付く、「やっべ落とされた」と。なぜかって？　振り向いた時には、もう銃弾が放たれた後だったからだ。

「発生見てから回避余裕でした」なんて格ゲーじみた事出来ないって。そう思いながら操縦桿から手を離し……かけたその時だった。

フェンリルが、弾丸を弾いたのだ。

「……えっ」

そりゃ誰だって驚くだろう、だって操作していなかったんだから。しかし、相手はそんなこと気にするかとサーベル片手に突っ込んできた。

「まずっ!?」

咄嗟にいつの間にか展開されていた両手のビームブレイドで相手の関節部ごと断ち切り、そのまま逆から迫ってきたハイパーナックルバスターを切り飛ばす。

「ッ、バインダー！」

肩部からミサイルが発射される前にコンソールを操作し、バインダーで肩部を切断。そのまま行動しようと正面を向いた瞬間、眼前にあったのはエネルギーを収束させていたメガ粒子砲だった。

「やっばい……！」

急いで回避行動を……あ〝っ間違えた、つま先のビームブレイド展開しちゃった。
「あああああああ!?!?!」
なんでこのタイミングでミスるかなぁ!?　思わず叫びながら目を瞑り……再びフェンリルが動いた。
動いたといっても、ただバク転しただけだ。それ以上でもそれ以下でもない。だがしかし、ビームブレイドを展開した状態でのバク転は、眼前のガ・ゾウムを真っ2つに切断するには充分だったのだ。そんな時私は……
「ぐえっ……」
Gに振り回されていたのだった。
「うぅ……ってあれ、さっきの機体は……」
とりあえずたまたま近くにあった目的のパーツを回収、帰還を選択。こうして初めてのヴァルガは、沸き上がる疑問と共に終了したのだった、まる。

帰還、そして出撃（やべーやつと姉を添えて）

さて、とりあえず戻って来たわけですが……

「……依頼主が消えたんですがそれは……」

そう、依頼主がいないのだ。同じ場所にいるって言ったじゃないですかお兄さんや……

「ミッションから場所を……」

……ミッション消えてね？

いやいやいやいや、まてまてまて。ミッションが消えるなんてありえる？　見間違えじゃなくて？　と淡い希望を抱きつつもう一度確認するが、いくら確認してもないものは無い。現実は無慈悲である。

「えええええええ……マジで言ってる……？」

じゃあなんだ、私が初ダイブで必死になって取ってきたパーツはどうすればいいんだ……

「とりあえずもらっとこ……」

――――――さて。

今回の戦闘で分かったことがいくつかある。それは……中・遠距離用の武装が少なかった事。現在フェンリルに搭載されている射撃武装は、ブレイド兼用のビームガンとビームライフルのみ。正直つらい。あとはビームライフルの弾数も課題だし……これは帰ってからでいいか。

それよりも気になるのは、終盤のアレだ。少なくともピンチの時に機体が勝手に動くシステムなんて積んでないし、そもそもそんなシステムは［ケストレル］とか［グリンブルスティ］には積まれてない。そうなると……

「……キミの意志だったの？」

と、話しかけてみるも返答なし。そうだよね、逆に話しかけられるのもちと怖いし。

まぁでも、

「……ありがとね、フェンリル」

ちゃんと助けてくれたお礼はしないと。さて、感謝も伝えられたし結局依頼主もいないし、とりあえずログアウトしますか……そう思い意識がＧＢＮから離れる直前……

――――――どういたしまして。

そんな声が聞こえた、気がした。

――――――

「……ふぅ」
　ヘッドセットを外してぐぃーっと伸びる。時刻は午後４時、いい感じの時間だ。
「楽しかった？」
「うん、めっちゃ楽しかっ……た……」
　……ん？　私は今、誰と会話してるんだ？　そう思い後ろを見ると……
めっちゃいい笑顔の友奈がいた。
「……」
「……」
「……あの」
「声掛けてって、言ったよね？」
「いや早くやりたかっ」
「言ったよね？」
「すいませんでした……」
　ふぇぇ……なんか圧が凄いよぉ……
「……ま、いいか。明日は一緒にやろ？　１人よりも２人とか３人の方が楽しいよ！多分！」

「あい……」

そんな会話をしながら夕飯を作り始める。今日は親子丼である。

「友奈ー、あれとってー」

「ほいな。あ、そこのやつお願い」

「あいよー」

……傍から見たら「どうなってんだこいつら」って言われそうな会話だなぁこれ。まいっか。

「ただいまぁー……！」

「お、ユキ姉おかえりー。夕飯もーちょい掛かるから先お風呂はいってきちゃったら？」

「本当？　じゃあお言葉に甘えちゃおうかなぁ」

「姉さんお背中流しますぜ……へへへ」

「なんか恐怖を感じるから遠慮しとくね」

「？」

「！？！？」

この人は虹橋　雪姫。私の１つ上の姉であり、昔私にガンプラのイロハを叩き込んだ張本人だ。今はこの３人で一軒家に住んでいる。

「あ、そうだ。空ちゃん、初めてのＧＢＮは楽しかった？」

「めっちゃ楽しかった！　……ん？　なんでユキ姉知ってるの？」

「そりゃあお姉ちゃんですもの、何でも……は分かんないけれど、空ちゃんの事なら分かるもんなのです！」
「私が教えた」
「友奈ちゃん!?」
「とりあえずユキ姉はお風呂入っといで……」

「ごちそうさまでしたー!!」
「美味しかったぁ……空ちゃんまた腕上がったんじゃない？」
「お粗末さまでした……そう？　変わってないと思うけど……」
さて、と。スケッチブックスケッチブック……お、あったあった。
「なーに書いてるの？」
「んー？　フェンリルの課題点。書き出すだけでも違うじゃん？」
後々改造する時に参考にもなるからね。
「なるほどね……ちょっと見ーせてっ！」
「あ、ちょっとユキ姉！」
「私も私もー」
「友奈まで……」

……まぁ、この２人私よりもＧＢＮ歴長いから、見てもらえるなら見てほしい……かな……

「「実弾兵装付けよ？」」

「確かに思ってたけどまさかハモって言われるとは思わなかったよ」

「あとはバインダーの位置かなぁ。ここもいいんだけど……」

と、こんな感じで約１時間ほど談義（？）は続いたのでした。

「今日からは私達も参戦じゃー!!」

「久しぶりのＧＢＮが楽しみで楽しみで今日はお姉ちゃん７時間しか眠れなかったよぉ……」

「それ世間一般では普通では……？」

いやっほう！　とＶガンのＯＰばりにジャンプする友奈……ダイバーネーム『アミカ』と、寝不足と言わんばかりにフラフラするユキ姉……ダイバーネーム『ユキ』。本日はここに私を加えた３人で、ちょっと難易度の高いミッションに挑むのである。

「あ、ユキのそのガンプラ……」

「……うん、新調してみたんだ」

そう言うユキの視線の先にあるガンプラは……００Ｎのアストレアをベースとした

機体だ。
「そういうミーちゃんも？　これまた凄いもの作ってきたねぇ……」
「私は関節部とか弄っただけだから……へへへ……」
　ちょっと照れながら笑うアミカのガンプラは……
「……ガデラーザ……で合ってる……？」
「んー、７０％当たり！」
「これまた随分と微妙な数値で……」
　確かによくよく見ると、本来のガデラーザよりも２割くらい大きい気が……いやちょっと待ってほしい。
「ガデラーザってプラモ出てないよね……？」
「？　うん、だから作った」
「「作ったぁ!?!?!?」」
「え、じゃあ中のファングたちは……」
「それも作ったに決まってるじゃん」
「この子やばいよぉ……」
　というか７０％って言ってたよね？
「と、ところで残りの３０％は……」

「残り？　本体」
「……本体？」
「私思ったんですよ、ＧＢＮって機体にコストがあるじゃん？」
「う、うん」
　例えばインパルスを完全分離型で運用しようとすると、チェストフライヤーとレッグフライヤーにそれぞれコストがかかる。そのため、武装が少なくなっちゃったりする……らしい。
「でも、それとなんの関係が……」
「だからね？　ガデラーザを武器にしたんだよ」
「……ごめん、お姉ちゃんちょっとよく分からない」
「いやガデラーザを武器に」
「今日のミッションは何かなぁ!!　楽しみだなぁ!!!（思考放棄）」
「ユキ?!?!」
　ユキ姉が考えるのを辞めてしまった……
「……ところでその本体というのは……」
「本体はガデラーザの中。もしものための保険ってやつ」
「それ何も変わらなくない？」

「でもこの子の真骨頂は」
「ところでソラちゃんの機体もちょっと変化してるね!!」
「露骨に話題そらされたぁー!!」
「お、気付いた？」
　そう、ちゃっかりフェンリルも強化されている。サイドスカートのバインダーが背部ブースターにマウントされたり、その場所に実体剣がついたり手に爪がついたり。
「……さて、そろそろ行きますか！」
「久しぶりのガンプラバトル……お願いね、アストレア」
「よっしゃ景気よく行ってみよー！」

「ユキ、ガンダムアストレアオリジン！」
「アミカ、Ｇ―テンペスト！」
「……今日も頼んだ！　ソラ、ガンダム［フェンリル］！」
「「行くよ！　（出る！）（行きます！）」」

【ＭＩＳＳＩＯＮ：不死鳥はここに甦る】
　概要：復活した不死鳥達に己の力を示せ。

勝利条件：フェニックスガンダム、ユニコーンガンダム３号機フェネクス（ＮＴｖｅｒ）の撃破
敗北条件：自チームの全滅
報酬：１００，０００ＢＣ、相手の装備パーツからランダムで３つ